

周作クラブ会報

(第46号)
2012年2月22日発行

周作クラブ

◆主な記事◆

会長あいさつ	1面
新年会報告	2面
連載「遠藤周作さんの思い出」	3面
長崎文学館便り	3面
「原稿発掘 追悼」北村天	4・5面

二〇一二年新年会「会長あいさつ」

突然目の前が真っ暗になり、心臓が止まった

マンドリン演奏と花束のプレゼントを受けた
加賀会長が、近況を振り返りつつあいさつ

加賀 乙彦

マンドリンとバイオリン

新年明けましておめでとうございませう。久し振りに周作クラブの皆さんと一緒に楽しいひとときを過ごせることを、心より嬉しく思います。また昨秋に、僕が文化功労者に選ばれたことと、足かけ22年間書き続けてきた長編小説を完成させたことを祝って、素敵なマンドリンの演奏をプレゼントしていただき、感激しております。

マンドリンを聴きながら、昔のことを思い出しました。僕は音楽が大好きですが、じつは若いころバイオリンを習ったことがあります。バイオリンとマンドリンには共通のものがあり、どちらを習おうか迷ったのですが、家にバイオリンがありましたので、3年間ほどバイオリンを習い、何とか弾けるようになりました。その後マンドリン



晴れやかな加賀会長

を習おうとしたのですが、大学で医学部に入ったため、あきらめました。医学部は大変忙しくて、とても楽器を習う余裕などなかったのです。

僕の妻はバイオリニストでした。20年間、素人楽団ですが、第2バイオリン奏者として活躍していました。その妻が突然亡くなったのは、3年前のことです。2008年の11月19日の夜、僕と妻は翌日に長崎へ出かける準備をしていました。「ペトロロ岐部と187殉教者」の列福式に参加するためです。僕は先に寝たのですが、夜中に目を覚

ますと、隣りに寝ているはずの妻がいまません。僕が寝たあとに、妻は風呂場でくも膜下出血で倒れて亡くなったのです。

その妻の遺骨を金沢のお寺に葬ったのは、2009年7月のことでした。東京に我が家の菩提寺があるのですが、キリスト教徒だということで納骨を拒否され、先祖の墓がある金沢の寺に相談したら、ご住職がどうぞということで、祖父母や父母の墓、1トンほどありました。トラックで運び、新たに我が家の墓を作ったのです。ご住職に納骨式をしていただき、カトリックの神父にミサをしていただきました。そんなことを、マンドリンの「アヴェ・マリア」の曲を聴きながら思いました。

ペースメーカーと大震災

「不幸は列をなしてやって来るけれど幸福は時々しかやって来ない」というのはドストエフスキーの言葉ですが、僕にとっては妻の死以後、不幸の列が続いたように思います。

昨年の1月18日、日本文藝家協会の理事の新年会のことですが、僕は一瞬目の前が真っ暗になって倒れました。心臓が10秒間ほど停止したのです。幸い意識を取り戻し、すぐに携帯電話で主治医に連絡したところ、至急東京医科歯科大学の救命救急センターに来るようということ、タクシーで行き

ました。そこでもまた一時意識を失い倒れました。

検査の結果、心房粗動ということでペースメーカーを入れることになり、体の中に鉄を入れることに抵抗したのですが、結局手術を受け、何とか普通に生活できるようになりました。そんなわけで去年の1月末の、周作クラブの新年会には出られなかったのです。その後退院して、何度目かの検診のため大学病院に行った帰り、3月11日のことですが、あの大地震に遭いました。何とか家まで歩いて辿りつきましたが、9階までペースメーカーの心臓で登るのは大変でした。家の中はメチャメチャ、大切にしていたシャンパングラスもみんな割れてしまつて…。阪神淡路大震災のとき65歳だった僕は、すぐに現地に駆けつけ精神科医としてボランティア活動に従事しました。今度もそうしたかったのですが、81歳で心臓病をかかえる僕は、ただ心を痛めるだけでした。悲しいことです。少しばかりの寄付はしましたが。

しかし、昨年の秋になって、時々しかやって来ない幸せが僕のところにも来たようです。そして今日、このように花束と音楽のプレゼントをいただき、嬉しい限りです。これからも、皆さんと一緒に、周作クラブを盛り上げていきたいと思っています。

(文責・高橋千剣破)